

【様式1-1】平成26年度部局目標評価(畜産技術振興センター)

平成27年3月31日現在

総合評価

試験研究部門(飼料の県内自給率の強化)については、計画どおり実施できた。
 生産部門(近江牛の生産基盤拡大)では、子牛育成技術の向上については計画以上の成果を上げたが、和牛受精卵供給個数、受胎率、和牛放牧における分娩管理、子牛の育成技術には課題を残した。来年度に再度実施するに当たり、課題を十分に検討する。
 技術指導部門では、乳用牛、和牛とも目標を達成できなかったが、手段には間違いがなかった。来年度は、分娩間隔短縮に対する農家の問題意識を高めていきたい。

個別目標

番号	項目名	目標の内容	(目標値)	評価	(達成度)	今後の対応
1	近江牛の生産基盤の拡大	①繁殖雌牛飼養頭数	①116頭	①119頭	○	子牛生産頭数増のため給与飼料等飼養管理方法を改善し、受胎率の向上、分娩間隔の短縮、周産期の事故の低減を目指す。
		②子牛生産頭数	②100頭	②81頭		
		③子牛育成技術の向上 6カ月齢体重	③雄: 210kg以上 雌: 180kg以上	③雄: 220.8kg 雌: 190.8kg 生産頭数は目標の8割に止まったが、子牛の発育は大変良好であった。		
2		①和牛受精卵供給個数	①100個	①50個	△	凍結受精卵の在庫を増やし需給のタイミングのミスマッチをなくす。採卵計画を周知し、新鮮卵移植の機会を増やす。
		②受胎率(受精卵移植)	②45%	②30.8% 上半期は受精卵の需要は少なかったが、下半期になり黒毛和種子牛価格の急騰のため需要が高まった。しかし、需要に供給が対応できなかった。		
3		放牧地における分娩管理と子牛哺育育成技術の確立		場内に放牧地を設置し、内部に哺乳欄を置き、分娩後、母子を哺乳欄に誘導し、柵越哺乳を試みたが、学習するまでには至らなかった。	△	哺乳欄の間隔、角度等の改良を行い、再検討を行う。

4	飼料の県内自給の強化	<p>①肉用牛における生米ぬか給与の肉量、肉質への影響を検証します。</p> <p>②乳用牛における稲WCS多量給与による産乳量、乳質への影響を検証します。</p> <p>③肉用牛、乳用牛における飼料用米給与の普及を図ります。</p>		<p>①生米ぬかを雌牛と去勢牛に給与したところ枝肉成績に影響なく飼養できた。</p> <p>②泌乳中期の搾乳牛に対し、稲WCSを給与したところ、乳量への明確な影響はみられなかったが、給与量を増やすと残餌がみられた。</p> <p>③飼料用米技術を研修会などにより関係機関、団体へ周知し、農家への技術的助言を実施した。</p> <p>乳用牛で1農家が新規に飼料用米の給与を開始、肉用牛で1農家がくず米の給与を開始、また、1農家で飼料用米の給与割合を増加やす予定。</p>	○	<p>①成果を関係団体、生産者へ周知。</p> <p>②稲WCSの適切な飼料設計を検討するとともに飼料用米との併給について検討する。</p> <p>③農家への技術的サポートを継続。</p>
5		生稲わらサイレージ調製技術の確立		前年度にβ-カテン含量が最も低下する傾向にあった酢酸について添加量の検討を行った結果、酢酸1%添加でβ-カテン含量は最も低い傾向となった。	○	長期保存による低減効果を検討する。 ほ場におけるラップサイレージでの効果を検討する。
6	酪農、肉用牛の生産性向上	分娩間隔の短縮	<p>①乳用牛分娩間隔14.1月（H25成績：14.3ヵ月）</p> <p>②繁殖和牛分娩間隔13.6ヵ月（H25成績：13.8ヵ月）</p>	<p>①乳用牛14.5ヵ月飼養管理技術の向上を目的とした牛群検定成績検討会を計6回実施した。また、重点農家6戸を対象に延べ68回の巡回指導を実施した。</p> <p>②繁殖和牛13.8ヵ月重点農家4戸を対象に63回の巡回指導を実施した。また、新規繁殖農家2戸で延べ8回の個別勉強会を行った。</p> <p>今年度は、天候不順と飼料価格の高騰などマイナス要因が重なり、乳用牛および繁殖和牛ともに分娩間隔の短縮につながらなかった。</p>	△	引き続き、繁殖障害牛の早期発見早期治療を指導するとともに飼養管理技術の改善指導を行う。また、生産者の技術向上を目的とした、飼養管理技術に関する研修会を開催する。

※達成度は、◎(目標値以上の実績があった)、○(ほぼ目標値どおりの実績)、△(目標値に達しなかった)、×(未実施)